

優秀賞 福岡県 緒方 陽子 様 (60代 女性)

「幸福とは1日の仕事が終わりと、2人で楽しく話しながら食事をする事です。人生は楽しいと言っていれば、それで楽しくなるのです。幸福とは1日1日の暮らしに感謝しながら暮らすことです。」

我が家の玄関に額に入れて掛けてある、この言葉は約20数年前に義母がくれた手紙の一文です。義母は書くことが好きな人で、60代になってからワープロを学び、ワープロで打った手紙をくれるようになった。この言葉は人生の教訓にと切り抜いて額に入れ、何処に引っ越しても何時でも見られる場所に掛けて来た。様々な事がある度に、綺麗で優しくった義母を思いだし、この言葉を読み「まだ、頑張らなくては。」と自分を励まして来た。

義母は若い頃から、休まずに働いた人だ。「私は65歳まで働いたのよ。」と言うのが自慢だった。それは、夫婦で厚生年金を持つ事に繋がり、如何に老後に年金が大切かを言い聞かせる為だった。「厚生年金を持っていると、老後は何とか暮らせるようになるのよ。」と、口癖のように言っていた。義父は若い時に自営業を営み、その後、会社員になった。厚生年金を掛けていたが、何度か会社を変わった事で、いざ年金の手続きをしようとした時に途中の会社が抜けているのに気が付き、手を尽くし、25年以上の加入期間が繋がり厚生年金を夫婦でも貰えるようになった。「年金が有るので子供達に援助を求めなくて生活が出来る事が有り難い。」と言っていた。そして、息子達には勿論、嫁達にも働く事を何時もすすめていた。私も若い時から、義母と同じように65歳までは勤めようと、思っていた。ありがたい事にこの春に退職をする67歳まで勤められた。若い頃に専業主婦の時期があり、娘が小学1年生になって35歳から会社勤めをしたので掛け年数が少し短い分、年金額は低いが、其れでも年金を持っている事の有りがたさを実感している。「まさしく年金は老後の命綱だ。」と思う。

知人の中には若い時には何店もチェーン店を持つ程に豊かだった方がいる。若くお金のある時には、「年金を掛けなくても十分なゆとりは或る。」と何の不安も無かったらし

い。「自営業は定年が無いので幾つになっても働く事が出来て収入がある。」と思っていた。それが、時代の変化で次々に店を閉める事になった。収入は激減して、60代の時には、最後の店をたたみ夫婦で勤めざるを得なくなっただけ。その年齢になると、パート職しかなく身体に辛い仕事に就かざるを得なかったと聞いた。今は70代だが、残念なことに夫婦とも無年金で、体に鞭打って働かざるを得ないと言う。救済処置にも現在の生活が苦しければ手が出ないらしい。このままいけば保護の申請をせざるを得ないと肩を落とされる。似たような方は多いと思う。

若い時は何時までも仕事が出来ることがあるが、60歳の声を聞くと、身体が彼方此方にガタがくる。気持ちはあっても身体がついて行かない。65歳、70歳、身体の不調は増すばかりだ。機嫌を取りながら無理をせずにボツボツと暮らすことになる。

その時に年金があると無いでは大差が出る。まずは若い時から正しく年金の手続きや保険料の納付を行うことが老後の為に、何より大切だ。

親が年金を掛けていれば、両親にもしものことがあった時には遺族年金などで救われる。

自身は勿論だが、学生を持つ親御さんにも子供への何よりの贈り物だと、本人が掛けられるようになるまで負担をしてあげて欲しい。

若い時の数千円は大した額では無いかもしれないが、老後には貴重なお金だ。

身体も体力も気力も経済力も弱る老後の為に若い時から、休まずに年金を掛け続ける事が大切だと伝えたい。

年金は老後の命綱だから。

一生懸命に働いて年金を掛け、年を経た時に、穏やかに暮らせるように準備が必要だと痛切に思っている。